

光復会成立前後の事情

——光復会論の(一)——

大里 浩 秋

はじめに

筆者はかねてより中国清末の革命結社光復会に興味を持ち、その中心的活動家である陶成章、徐錫麟、秋瑾について、年譜あるいは伝記風に書いたことがあつた。⁽¹⁾その際、いづれはそれらを一緒にし他の活動家の分を加えて、光復会論の形でまとめてみたいと思つていた。

その項目にした論文に、童熾昌「魯迅参加光復会的新傍証」⁽²⁾があつた。それには、一九四五年に光復会が「中興」され、公称一九万の会員が参加していたことが紹介されていた。従来光復会は、辛亥革命直後一九二二年一月に陶成章が暗殺されてからというものの、活動は沈滞しまもなく消滅したといわれており、それはおそらくその通りであろうが、昔をなつかしむ旧会員やシンパが多勢いて、三十数年を経て同窓会的光復会の名乗りをあげたものと見える。私はこの事実を知つて、光復会論を書くのなら、陶成章暗殺にとどまらぬ、その後の会員たちの生きざまをも関心の内

に入れたものを書きたいと思ったものだった。が、今書き出すにあたつて、どこまでそれをカバーした内容になるかは心もとない限りである。

構成としては、まず史実を中心に成立前後、前期、後期、辛亥革命後の四つの時期に分けて光復会の活動を整理し、次に思想的かつ概括的に見た場合の光復会はどうとらえられるかを論じるつもりである。ここで思想的にというのは、光復会に参加した人々の行動を支えた考え方や思想的背景をさぐるといった程度の意味であり、先に史実を追つて言及し切れなかった内容をも、そこに含めるつもりであることを予め了解していただきたいと思う。

- 1 「陶成章年譜（稿）」（『老百姓の世界』二、三、四号、未完）、「排滿を叫んで駆け抜けた男の生涯——徐錫麟略伝」（『中国研究月報』一九八四年十月、十一月号）、「日本人の見た秋瑾——秋瑾史実の若干の再検討」（『中国研究月報』一九八五年十一月号）。

- 2 『復旦学報』一九八一年二期。

第一章 光復会成立前後の事情

一

光復会は暗殺団を母胎として成立したというのが定説である。当事者による証言に照らしてその点は疑いようがなく、すでに多くの研究が複数の証言に依拠しつつ、くり返しそのことを論じている。日本でも、例えば小野川秀美氏は、丹念な資料分析をし疑問点は保留しつつ、「何れにしても、龔宝銓の暗殺団を母胎にして、蔡元培を会長に推し、光復会が成立したことは、疑いのない事実であろう」⁽¹⁾とまとめているのである。しかし、光復会の成立事情についてもはや論じ尽くされたのかといえ、そうとはいえない。依拠するものは同じでも、その分析次第で、従来千篇一律に扱われあいまいにされたままになっている部分に、新しい角度からスポットライトをあてることができるのではないかと考える。そこでまず、光復会に特徴的な会党重視がいつ頃から始まったのかという点から見ていきたい。

光復会の指導者の一人である陶成章、字煥卿、浙江紹興府会稽県出身、が会党の動きに注目し始めたのは、資料による限りでは一九〇三年秋（陰曆、以下ことわらない限り同じ）の、日本に留学している時期のことである。彼自身の言によれば、留日士官学校学生鄭某と祁文豹に、浙江に行つて秘密結社に運動するように勧められたとあり、彼は台州に行つて伏虎会的首領王錫桐に会おうとしたが、権力の弾圧を避けて他所にいたので、果たせぬまま東京にもど

った。なぜ王錫桐に会おうとしたかといえ、台州府寧海で王錫桐をリーダーに仇教運動がおこり、数千人の大衆を動員して教会を破壊し宣教師や教民を殺害したが、清朝の弾圧に遭って多くの犠牲を出したことを知ったからである。陶成章は、王錫桐らの行動に共感しつつも、今大事なのは排外ではなくて排満であることを王に訴え、共闘の道をさぐろうとしたと推量される。こう推量するのは、陶成章自身の文章にくり返し排満の必要性が訴えられているからであるが、さらに、彼が台州に行ったとほぼ同時期に出された『浙江潮』第十期に載った「敬告寧海之開教者并徐承礼之罪」にも同様の趣旨が詳しく述べられているからである。この文は、教民保護のみを重視してそれに反対する民を弾圧する官吏を糾弾し、このように外国勢力に媚びる連中こそ国を亡ぼすものだと、仇教の考えを改めるべきだと主張しているのである。『浙江潮』は浙江出身の日本留学生によって組織された浙江同郷会の機関誌であるが、編集や執筆に関わった主要なメンバーのほとんどがのちに光復会会員になっていることから見ても、この雑誌に発表された内容が、結成される前年における光復会員の問題意識を強く反映したものになっていると考えるのは自然である。だが、『浙江潮』の諸論文の検討はあとに譲り、ここでは、王錫桐らの行動に注目したのをきつかけに、陶成章や他の浙江出身の留学生たちは、石田米子氏が明らかにしているような、二十世紀初頭に浙江各地でおこった仇教運動が全て会党の指導で行なわれ、それがことごとく弾圧されている事実を知ることになり、それらの巨大なエネルギーを集中して反清朝の方向に向けさせなければならぬと考えるようになったのだととらえておく。

陶成章はまた、同年秋、広西の柳州でおこった蜂起を支援しに行こうとしたが、すでに鎮圧されたことを知って中止したという。⁽⁴⁾ 事の詳細は明らかでないが、数年来続いていた会党蜂起に手を焼いた広西巡撫王之春が、同年フランスに出兵を要請してそれを鎮圧したとことと関連していると思われる。王之春は、鎮圧と交換に広西の鉄道と鉱山の権

利をフランスに譲り渡したことから、その情報を得た東京の留学生は四月末に全体の抗議集会を開き、その後拒俄運動と並行して拒法運動が取り組まれているのである。⁽⁵⁾

ところで、同年夏、湖南出身の留学生楊篤生の筆になると推定されている「民族主義之教育」⁽⁶⁾にも、秘密結社を重視する見解が見られる。この論文は、拒俄運動の中で結成された軍国民教育会の方針をめぐって提起されたものだが、中村哲夫氏の労作に従えば、それは「中国の底辺の下層民衆の前期的前衛とも称されるべき闘争力との提携と知識人の側からの啓蒙の必要を語」り、「会党勢力を主体とする『下等社会』に対する啓蒙宣伝活動を展開して『根拠地』を形成するには、知識人・学生によって構成される『中等社会』を活動舞台とし、かつそれを前衛的戦線とするべき旨を説いている」。ここにおいて、会党重視は陶成章ないし浙江のみか、他省の留学生にも共通する問題関心であったことを知りうるのであり、また、国内の会党の動きに触発されたのみか、下等社会に注目しその啓蒙にあたるという点で、ロシア虚無党の思想の影響を強く受けたものでもあることを知りうるのである。だが、すぐあとに確認するごとく、「民族主義之教育」の主旨を文字通り体あたりで実行に移したのは、浙江を舞台にした陶成章らであった。

さて、陶成章がこのような動きをしたあと、沈黙の証言に従えば、東京の浙学会での協議があつて、陶成章と魏蘭は浙江にもどり会党回りを開始するのである。あるいは、秋以降陶成章が会党に向けて示した動きが、全て軍国民教育会の方針に沿ったものだと説明することも可能であろう（二で詳述）。いづれにせよ、陶成章と魏蘭はそれから十か月ほど浙江各地を回って、会党に連絡をつけオルグする活動を展開する。開始にあたって、留学時の友人孫翼中の紹介で、白布会首領の濮振声を杭州の獄中にたずねている。濮は一九〇二年、仇教運動の先頭に立つて闘い逮捕されたが、陶成章の見方では仇教は口実であつて、実は反清蜂起をしたのである。その証拠に、蜂起前秘かに宣教師に

告げて逃がし、蜂起後も罪は官吏にあるといつて、ゆえなく教会を壊したり教民を殺したりするのを禁じたという。仇教より排滿を大事とする陶成章にとっては話のわかる首領だったわけで、両者の話は合ひ、僕は陶成章らがこれから会いに行く先々の会党あての紹介状と名刺を書いてくれた。その後二人は、時に別個に時に合流して、徒歩または船で浙江東部の嚴州・衢州・金華・処州・温州・台州各府に属する諸県を回つて会党工作をするのであるが、その際濮振声の紹介状が威力を発揮して、陶成章が各地で白布会メンバーの世話になった様子が知れ、また魏蘭も、例えば処州で龍華会の丁鏢に会うと、彼と一緒に李造鍾のところに行き、今度は丁鏢の他に李造鍾をも伴なつて呂嘉益・呂熊祥に会いに行き、さらに呂嘉益の紹介で龍華会の正会主沈榮卿のところに行くという具合に、人脈をたどりながら次々と働きかける会党の輪を広げている。信頼できる人の紹介による兄弟のごとき結びつきは、秦惟人氏も指摘するように、まさに会党の結合原理といえるものであり、陶成章らは自ら求めてこの結合関係を作りあげていったのである。⁽¹⁰⁾「浙東各県には多くの山が連なり会党もたくさんあつたが、陶成章はいつも足にわらしをはき頭に笠をかぶり、腰には縄をしめて、山間部に入つて一日に数十里進むことがよくあり、それをまったく苦にしなかつた」というその間の事情を知る者の回想があるが、このようにして各地を回つた末に「今や金・衢・嚴・処・温・台六府の秘密会党の状況は、ことごとく我々はつかんだ」と豪語しうる成果を得たかのごとくである。⁽¹¹⁾

陶成章が成果としてあげているのは、一に調査があり、会党の状況のみか、その周辺にある清軍の兵營や住民（原文には「貧乏人と金持」とある）の状況、地理・地租等を調べて記録し、二に、会党同士を連合させ、三に会黨員を啓蒙した。啓蒙には『革命軍』や『猛回頭』などの革命をうたつた書籍を広める方法を用い、人が多く集まるところには新聞を送った。その結果、浙東には革命思想が中等・下等の二社会に普及して、教民と一般民衆の紛争もなくな

り、排外思想は排滿思想に変わったという。彼が成果の一とする調査の全容を今知りえないが、彼らの関心が単に会党にあるばかりでなくその地域の住民にもあることは明白である。また成果の二は、俗に哥老会系は「各種の小結社に分散し互に相疎隔して連絡なく」といわれる状況を打破し、先に見たような人のつながりを巧みに利用して得たものである。さらに成果の三に関連して、各地を回る間に魏蘭が故郷雲和で学校をつくりそこに陶成章が二ヶ月滞在して教師を勤めたこと、行く先々で魏蘭が演台にのぼって人種の別や民族主義を演説したこと、陶成章が地相見と称して龍華会の副会主張恭の率いる劇団について回ったことなど、会党を含む農村住民を啓蒙する具体的なエピソードが紹介されているのは興味あることである。

陶成章と魏蘭の証言中にあるこの間の動きで、注目すべきことを二点だけ取り出しておく。一つは、会党回りの途中、時間を特定できないがおそらくは六、七月頃、陶成章が嘉興に行き、龔宝銓と共に敖嘉熊に会っているところと相談している点である。敖嘉熊は嘉興府平湖の人で、先に杭州に行つて浙会に参加し、王嘉桀・蔣百里らと時事問題を議論したことがあり、一九〇三年上海に行き愛国学校に入ったが、蘇報案がおこつてから故郷にもどり、「演説」「教育」二会を創設した。⁽¹⁵⁾ 陶成章らが会つた際、敖嘉熊は嘉興に温台処会館を作る準備をしており、二人はその相談に乗つたのである。この会館は、太平天国後浙東の温州、台州、処州から、荒れた土地を開墾すべく北部の嘉興に移住した農民（客民）を結集させる場として作ろうというもので、土着民よりも厳しく税を取りたてられている客民に代つて税を納めて、彼らを搾取から守つてやる一方で、団練を作つて地域の兵権・財政を握り、一たん事がおこつたら団練によつて郷里を守ろうと考えた。しかも、対立している土着民と客民の感情を和らげて客民の不安を取り去るという名目で、役人や土地の有力者の了解を得て合法的な機関をよさう形で設立しようとしたという。つまり会館は、

地域住民の相互扶助組織であると同時に、合法的な地域権力をめざしたものであったのである。⁽¹⁶⁾ この内容のどこまでが敖嘉熊の発想になり、どこからが三人の協議したものかは判然としないが、私は、最終的には三人の合意の下でこのプランができたと考えて話を進めていく。

彼らの相談はそこにとどまらず、浙江のみで軍事行動は可能かについて意見を交した。彼らが一致した考えは、浙江だけでは守り切れない、浙江で蜂起しようとすれば、まず南京の情勢に注意しなければならない。また安徽は南京の上流に位置し、上は両湖（湖北、湖南）に接し、下は江浙（江蘇、浙江）に通じるから、ここにも兵を配置しなければならぬ、というものだった。そしてこの考えに基づいて、会館を三カ所に設けて、周辺の会党を結集する案を作っている。一つは松江に設けて江蘇南部の諸都市の会党を組み入れる、一つは湖州に設けて安徽の寧国、広徳および浙江の嚴州、衢州の会党を組みこむ、もう一つは杭州に置いて浙西の諸都市の会党を組み入れるというものである。また、他にも呼びかけ、蜂起の際は四省（浙江、安徽、江蘇、江西のことか）が一勢に決起して南京を孤立させる。そこで、暗殺手段を用いて南京を混乱させれば、戦わずして降るであろうと考えている。机上のプランに終わったとはいえ、各地の会党勢力を結集して南京を攻略する蜂起計画があり、そこでは補助手段として暗殺も考えていたことが知れるのである。

会館の成立は九月、十月のことで、陶成章の紹介で魏蘭が責任者になり、また魏蘭が会党めぐりの際知り合った丁鏢、呂熊祥らが事務員となって遅れて赴任し、敖嘉熊の出資の下で湖州、杭州、台州、処州、松江などに人を派遣して調査を行ない、成果を得てもどったという。しかし翌年四月には、費用の一切の責任を負う敖嘉熊の財政が逼迫して会館が維持できなくなり、活動不能に陥っている。先に見た壮大な蜂起プランは、実行の緒についたばかりで一頓

座を余儀なくされたわけであるが、三人が温台処会館を設置し、そこを結集軸に会党を連合して蜂起しようとするこのプランを協議したのは、光復会成立以前のことだったという点は注意する必要がある。会館の活動が停滞する前後から開始される紹興の大通学校創立に関わる活動も、会党の結集を中心とするものであり、こうした光復会に特徴的な組織化の原型が、すでに陶成章らの会党めぐりの過程で検討されていたのである。

注目すべきもう一つは、温台処会館開設の相談をしたあと、八月に上海に行つて蔡元培と協議して黄興ら華興会グループが十月十日に湖南の長沙で予定している蜂起に呼応することを決めたが、その際陶成章が慎重な態度をとった点である。自ら語るところでは、彼は湖南と同時に蜂起するのは妥当でないと主張して三日遅れて呼応することにし、その足で嘉興に行つて龔宝銓、敖嘉熊と呼応策を協議してから金華に着き、そこで一切の準備を終えたとしている。ところが、その時行動を共にした魏蘭の証言では、この部分の内容が具体的に、金華に行く際舟をやって『猛回頭』など数千冊を積んで行き秘かに各地に配ったこと、および龍華会の張恭が劇団を組織して金華周辺を回っているのに合流し、表向き地相見と称して占い事をしながら劇団について回ったこと、しかしその間、呼応の計画については極秘にしており、長沙蜂起が予定されていた十月十日になって初めて周囲に打ち明け、龍華会の沈栄卿や張恭に頼んで急拠呼応の準備をしたことになっている。二人の証言内容の差は考えさせられることだが、陶成章の呼応のイメージとは、おそらく一方では敖嘉熊らと協議しつつ、現に働きかけている会党に対してはぎりぎりまで明かさずに組織化に努めてその時の状況に見合った呼応策を実行し、状況によっては中止して無駄な犠牲を避けるというものである。そして陶成章らは、現実には長沙蜂起が失敗に終わったことを知った時には、懸命に計画をもみ消して犠牲を最小限に食いとめているのである。ここには、浙江における会党の組織化を最重点に置いて黄興らの蜂起計画に対応した、

陶成章らの独自の動きを見てとることができる。

以上、陶成章らの会党めぐりの状況を見てきたが、時間的にはそのあとに位置する徐錫麟の会党への働きかけについても一瞥しておく。徐錫麟字伯蓀、紹興府山陰県の出身、会党に接触する前から紹興府学堂の教師をして、課外には秘かに学生に革命を語り、また、紹興城内に西洋の知識を紹介した本を扱う本屋を開いている。一九〇三年春に來日して陶成章らに會つて留學生の運動に觸れて帰國。同年九月ロシア軍が遼東に進駐したことを知るや、慟哭して復讐を誓い、ロシア人の顔を描いてそれを的に射撃練習をし、ある時弾がはね返つて肩をかすめたことがあつたが少しも動じなかつたというエピソードがあり、また一九〇四年春、フランス人の教会が紹興城内の大善寺を無理やり買ひあげようとした時には、マラリアの病を押して反対演説をぶち、大衆を立ちあがらせて阻止に成功したことが知られている。

さて、一九〇四年冬、彼は嵊県に行つて平陽黨の首領竺紹康と親交を結んでいる。詳細は不明だが、雪の降る晩竺紹康をたずねた彼は、革命の宗旨を語つて刀とピストルを贈り、竺は協力を誓つたという。⁽¹⁷⁾そのあと上海に行き、陶成章の証言によれば、蔡元培に會つて光復會に加入し、その場に居合わせた陶成章から彼の会党めぐりの体験をきいて故郷に帰つた。そして翌年一月、學生數人を伴なつて浙東の諸暨、嵊県、義烏、東陽の四縣を回つて縵雲まで行き、「日中は百里進み夜は社に泊つて、各地の文武に秀れた人士と交流して、二月に帰つた」。⁽¹⁸⁾先に嵊県で親交を結んだ竺紹康のつながりでこれらの地域を回り、そこで連絡をつけた会党は陶成章が前年に回つた会党とはだぶらなかつたことが推量される。回つたあとの感想に、「數縣を遊歴して秀れた人士數十人と知り合ひ、中国もなかなか捨てたものではないことを知つた」⁽¹⁹⁾とある。

こうして、陶成章らおよび徐錫麟の別個の行動があつて、従来光復会が結成されたといわれる前後には、そこに会党が結集する条件が基本的にできあがつていたことを知りうるのである。

- 1 「光復会の成立」(『東方学報』四一号)。
- 2 「浙案紀略」上巻第一章第一節、六府之連合(中国近代史資料叢刊『辛亥革命』第三冊)。
- 3 「清末浙江農民闘争と光復会の役割について」(『中国研究月報』一九八二年三月号)。
- 4 魏蘭「陶煥卿先生行述」(『辛亥革命浙江史料選輯』)。
- 5 『浙江潮』第四期、留学生記事、拒法事件。
- 6 『遊学訳編』第十期。
- 7 「華興会と光復会の成立過程」(『史林』五五卷二号)。
- 8 「記光復会二三事」(『辛亥革命回憶録』第四集)。
- 9 「浙案紀略」中巻列伝一。
- 10 「帝國主義成立期の浙江農村社会——台州土匪と浙江革命派」(『歴史学研究』一九八一年度大会特集)。
- 11 樊光「我所知道的陶成章」(上海人民出版社『辛亥革命七十周年——文史資料記念專輯』)。
- 12 注(2)に同じ。
- 13 外交資料館資料『清国に於ける秘密結社』。
- 14 注(2)と(9)および(4)に同じ。
- 15 注(2)に同じ。ただし「記敖嘉熊」(『浙江辛亥革命回憶録』)には、「競争体育会」を創立した、とある。
- 16 他に「記敖嘉熊」に、嘉興に温台処会館を設ける意味についての言及があるので、参考までに記す。「嘉興は江蘇、浙

江兩省の交通の要衝で兵家が必ず争うところであり、湖州、松江、蘇州、常州各県への交通はとりわけ便利である。しかも府属各県にはどこでも温、台、処各県の客民がいる。会館を設立すれば、江南各県の連絡センターになることができる。「嘉興は上海に近く、交通も便利だから、嘉興に拠点があると、上海の活動に有利である」。

17 「竺君紹康光復事略」(『民立報』一九二二年八月三十一日(陽曆)号)。

18・19 「浙案紀略」中卷列伝二。

二

次に、光復会成立に関わった当事者の証言を再吟味し、それに一で確認した会党への働きかけを重ね合せると、従来の理解とは異なる成立事情が見えてくることを明らかにしたい。

まず陶成章だが、すでに一でも主にそれに依拠したごとく、他の証言者とは比べようがないほど広範囲にかつ詳細に光復会の歴史を綴っている。しかしひとたびその著「浙案紀略」の内容を検討すると、決して武田泰淳が不用意に述べたような「浙江地区におけるおびただしい数の活動家の運命について、まことに詳細かつ正確に記しとどめ」(傍点は大里)たものとはいえず、あるところは詳細だが別のところは簡単にすぎ、またあるところははつきりと記すが別のところはあいまいであつて、極めて貴重な内容ではあつても、それが客観的とはいいいがたいところがある。その点に留意して彼の証言を見る。⁽²⁾

「軍国民教育会が出てから、革命党員の役割は一大進歩をとげ、しだいに鼓吹から実行の時代へと移った。湖

南の楊卓林「篤生」、黄興らは軍国民教育会の会員として帰郷運動を行ない、同志を集めて別に華興会という組織を作った。彼らは長沙蜂起をおこそうとし、失敗して上海に逃げた。各省の軍国民教育会会員もまた多くが帰国して上海にとどまっていた。軍国民教育会の組織に暗殺団があり、極めて厳格な規則の下に活動していたが、上海の中国教育会会長蔡元培のうかがい知るところとなり、希望して入会した。そこで名を光復会と改めたが、復古会とも呼び、軍国民教育会の名は消えてあとかたもなくなくなった。光復会が成立したのは、まさに万福華が王之春を射殺しようとしてあたらなかった時のことだった……甲辰「一九〇四年」冬、「陶成章は」また日本に渡ろうとして上海を経由した。この時、蔡元培はすでに人望を得て推されて光復会会長になっていた。元培と成章は同郷であり、成章はもともと元培の德行に尊敬の念を抱いていた。元培が光復会を組織したのは、暗殺を実行するためであったが、暴動をおこす考えも持っていた。「元培は」成章が内地の各秘密結社と関係が深いことを知って入会を勧めた。成章は無下にことわることができずに、ついに入会した。……この時元培のいとこ蔡元康「国親」が紹興に行つて商学二界に働きかけ、成章はすでに入ったと説明した。諸志士は成章が入会したときいて、こぞつて入会した。徐錫麟もこの年冬十二月に上海にきて愛国女学校で元培に会い、光復会会員となった……。「〔内は大里による補足、以下同じ〕」。

周知のごとく、光復会は軍国民教育会の暗殺団を母胎にしているとの通説が成立するのに、陶成章のこの部分の証言が最も力にあずかっている。しかし、その割には肝心の暗殺団から光復会に移行する経過の説明が簡単にすぎ、これでは蔡元培が入会したとたんに、暗殺団が丸ごと光復会になったと読みとれることになり、果たしてそう単純なものだったのかという疑問が生じる。その前の軍国民教育会に関する部分は、あとも触れるが、記述に問題がないだ

けに、一層光復会の成立経過の説明が粗略なのが気になるのである。おそらく、陶成章は意図してこのように記したと思われる。軍国民教育会の活動を継承したのは光復会であることを印象づけたからというのがその一。「浙案紀略」の該当部分は「革命党秘密会沿革の名称」と題した箇所、主として日本留学生によって取りくまれた革命運動上意義のある集会名や組織名を、勵志会、亡国記念会、青年会、義勇隊及軍国民教育会と順に記した次に光復会を置いていることから、この類推は可能になる。そして、光復会が軍国民教育会の暗殺団の活動を引き継いだということからは、軍国民教育会の名前はもはや不要になり、それゆえ消えてなくなったと書くのも必然なわけである。また、黄興らの失敗した動きをその前に記すことで、光復会は黄興らの活動を吸収して、成立したことを暗示し、その影響力を外に向けて宣伝したかったからというのがその二。「浙案紀略」の光復会の項に続く同盟会の説明として、「黄興と蔡元培は孫文を会長に迎えようとはかった」と、誰の目にも明らかでためを書き、また彼が東南アジアの華僑向けに革命軍資金カンパを募った際の領収書裏に記した「簡章」にも、「光復会は由来すでに久しいが、乙巳「一九〇五」夏、総会長蔡、湖南分会長黄は、衆望一致するところに従って孫中山先生を会長に推し、日本の東京で会を開き同盟会と改名した」と「浙案紀略」以上に明白なうそを書いていることから、この推量も可能になる。「浙案紀略」と「簡章」を書いたのはいづれも一九〇八年のことで、その時期陶成章は資金カンパを集める件で孫文との対立が尖鋭化しており、翌年には同盟会での孫文のヘゲモニーを奪わなければならぬと行動をおこすことになる。そこで、その間の事情を知らない一般華僑に向って、光復会の存在を高めるための作文をし、それによって資金カンパ集めをはじめとする今後の光復会の活動を有利に展開しようとした。革命党の沿革を軍国民教育会↓光復会↓同盟会とするからには、翻って暗殺団から光復会に改称されたという部分も、その事情を詳細に語らず、むしろあいまいにするこ

とによつて、軍国民教育会が光復会に発展的に解消したことを印象づけようとしたと考えられるのである。

さて、陶成章の証言を見て感じる特徴の一つに、光復会成立の事情をもっぱら蔡元培との関連で述べようとしている点がある。会長に就任したのだから、彼の動きにあるスペースを割くのは当然としても、それ以外のことに触れないのは不自然である。なぜ陶成章が光復会成立部分をこのように書いたかについては、沈應民の証言に、陶自身がその成立に深く関わった事実を隠して、奥ゆかしくも創業の功績をひけらかすのを避けたのだ、とある。ありうることはあるが、それだけではあるまいという気がする。「浙案紀略」の全編に、陶成章自らの行動や判断の正しさへの確信がみなぎっており、この成立の部分にも、自分が光復会に参加したことを知ると、同郷の志士はこぞつて入会したと書いて、自分の影響力の偉大さを隠していないからである。やはり、ごちゃごちゃしたであろう経過説明を避け、気骨ある著名な学者を中心にするにすえてしかもあいまいに書くことで、多くの省の出身者が参加した軍国民教育会を継承しさらに直接同盟会へと連なるといふ、多分に偽りを含んだ光復会のイメージを強調したかっただと思う。その代りに、自分たちが会党に働きかけて光復会を支える勢力を結成以前から育てていた事実は、一で見たように「浙案紀略」の別の箇所ですべて証言しているのである。なお、従来敖嘉熊と魏蘭は光復会に加入しなかったと見られているのは、陶成章が成立前後の事情を蔡元培を中心に書いたせいである。敖嘉熊は蔡元培の勧めをこつとわつて入らなかつたし、魏蘭は遂に蔡の拒否にあつて入らなかつたと陶成章はいふが、それは成立直後の事情であつて、沈應民(4)のごとく、その後に加したと考えるのが彼らと陶成章ら光復会会員との密接な関係からしても自然である。また、以上のように陶成章の証言を見てくると、成立した時間は万福華事件がおこつた時というもの、他に同様の証言がない（あつても陶の証言を受けいれているもの）だけに、疑つてみる意味はあろうが、それはあとにしたい。

別の証言を見る前に、ここで先の陶成章の証言に出てきた軍国民教育会について、必要最小限でまとめておく。一九〇三年、ロシアが義和団鎮圧に派遣した軍隊を約束通りに撤退させず、逆に増派して東三省を領土にしようとする野望を露骨に示したことに反対して、拒俄運動がおこった。留学生たちは四月に拒俄義勇隊を組織し、すぐに学生軍と改称、日本の警察の干渉を受けてさらに軍国民教育会と改めて運動を続けていく。その過程で、清朝の北洋軍が出動してロシア軍を追い払うべきだと訴え、留学生自らも軍に投じる決意を伝えるために、二名の代表が北京に派遣される。しかし「名目は拒俄だが実は革命をめざすものだ」とみなされて相手にされず、運動参加者への弾圧の脅しがかけていく。そこで代表が日本にもどった機会に組織の再編が計られ、以後非公開の活動に入り、会員中から実行員を選んで帰国させ、各地で革命に向けた実際の工作を実行することになる。これを帰郷運動といい、実行の方法としては、鼓吹、暗殺、蜂起の三種が考えられていた。この三種にまとめたことに、ロシア虚無党の戦術思想の影響を強く感じるのは、一で見た会党重視の考え方にそれを感じたのと同様である。虚無党の思想をいかに受容したかの分析は、さしあたり前掲中村哲夫氏の労作に譲り、今は例えば『浙江潮』に「全世界に専制国が二あり、一はロシア、一は我が中国⁽⁷⁾」という現実のとらえ方があり、「ロシアに虚無党あり、無数の産業、無数の汗血、無数の爆裂弾を積み、専制横暴な政府と死戦す、殺人麻のごとく、流血潮のごとし、前者倒れて後者継ぎ、必ずや自由を得てのちやむ⁽⁸⁾」というヒロイックな評価の仕方があって、これらの文章が専制を打倒しなければならぬと考える青年たちをロシアでとられてきた虚無党の戦術に注目させるに力があつたことを推量するにとどめておきたいと思う。

なお、浙江出身で軍国民教育会に参加した者としては、龔宝銓、王嘉榘、許寿裳、董鴻禕は名簿上確認でき、魏蘭や拒俄運動の当初就職先を斡旋するとだまされて北京に行き、のちに東京にもどってから軍国民教育会のメンバーに

官界のスパイと疑われた陶成章も、疑いが晴れてから遅れて参加したようである。陶成章の場合、留学前の一九〇〇年に一人で北京に行き、西太后を刺殺しようとして果たせなかったことがあったという。憂国の情あふれる血気の青年が暗殺行為に走る時、それは皇帝アレクサンドル二世を暗殺したロシア虚無党の影響を受けた可能性が強いと同時に、古く荆軻が秦王を刺した祖国の伝統をも受け継いでいたのであろう。

次に、光復会結成時の会長蔡元培の証言を見る。蔡元培字子民、紹興府山陰県の出身、翰林院編修の地位から革命の道へと進んだ。一八九八年紹興で中西学堂の校長に就任して新式学校への関わりが始まり、一九〇二年上海で中国教育会を創立して「表は教育をして裏では革命を鼓吹した」といわれた。共に創立に加わったものに蔣智由、林獬、王季同、汪德淵、鍾觀光、黄宗仰らがいた。同年冬南洋公学でおこったストライキで退学になった学生を受け入れて愛国学社を創立、主任教師に章炳麟を招き、学社の学生はすべて中国教育会の会員とした。一九〇三年春、日本の留学生が拒俄運動をおこしたのと同時に上海でも拒俄大会を開催。同年閏五月蘇報案がおこり章炳麟、鄒容が捕えられた時は、蔡元培にも逮捕状が出て一時青島に身を避けた。同年対俄同志会を組織すると共に俄事警聞社を創立。発起人に劉光漢、陳競全、葉瀚、王季同、陳去病、林獬らがいた。一九〇四年日露戦争勃発後、対俄同志会を争存会、「俄事警聞」を「警鐘日報」と改称、この新聞の主筆は劉光漢、執筆者に汪德淵、孫寶鏡、柳棄疾らがいる。同年後半、蔡元培は警鐘日報社を離れて愛国女学校校長に専念し、一九〇六年秋までその職にあった。彼は先に見た陶成章の証言にあるごとく、暗殺と暴動を共に重視する考えをしており、「愛国学社では暴動の種子を植えつくるべく極力軍事訓練に努め、暗殺は女子にこそ適している⁽⁹⁾ので、愛国女学では暗殺の種子を植えつけようとした」。上海の蔡元培の周囲の知識人においても、東京の留学生と同様、清朝打倒の戦術としてロシア虚無党の影響を受けたことがうか

がわれる。

蔡元培はいう。

「東京の同盟会が成立して、楊篤生君、何海樵君、蘇鳳初〔鵬〕君等は、暗殺から取りかかることに決め、六人の同志を集めて某日本人に爆薬の製造法を学び、相互に監督し合う規則を定めてそれを厳守した。何君は上海で私をたずねて数回密談した。〔何君は〕まず「私を」同盟会に紹介して入会させ、ついで暗殺団に紹介して入れた。〔何君は〕また、蘇君がまもなく上海にきて「日本で」学んだことを他の同志に教えることになっているといった。その後蘇君は数人の同志と「上海に」やってきて私のところに泊った。私は彼らのために家を借り、また鍾憲鬯〔觀光〕君を紹介して「暗殺団に」入会させた。鍾君が化学に精通していて、科学儀器館で器具や薬品を買うのにとっても有利だと考えたからである。会を開く際には、黄帝の祭壇を設け、誓約書を若干枚書き、人数分一枚ごとに皆が署名し、鶏を一羽割いて紙に血をしたたらせ、ひざまずいて宣誓すると共に、鶏の血を酒に混ぜて飲み、誓約書は各自が一枚ずつ所蔵した。爆薬製造の講習は数日で終った。爆薬はつくれるようになったが、薬莢がないのでどうにもならない。まもなく黄克強〔興〕君、蒯若木君、段□書君らが前後して東京から薬莢十枚余を携えてきた。〔私は〕この時までにすでに王小徐〔季同〕君、孫少候君を「暗殺団に」紹介して入会させており、そして孫君に爆弾を持って南京に行かせ、人里離れたところに隠れてこれを試させたが、失敗に終った。その後楊篤生君がきてこの仕事にとっても熱心に取り組み、また別に家を借りて連絡機関をつくり、毎日王君、鍾君らと薬莢の改良に努めた。その頃かかった費用は孫君が主に担当し、機関の運営は私といふこの元康〔国親〕が受け持った。元康はすでに私の紹介で「暗殺団に」入っており、同郷の王子餘、俞英屋、王叔枚、裘吉生およ

び徐伯蓀の諸君を紹介して「暗殺団に」入れた。徐君はこの時すでに嵎県、天台の諸會員と連絡をとっていたが、金華、衢州、嚴州、処州等の諸府の会党には、陶煥卿が働きかけていた。私は陶君を紹介して「暗殺団に」入会させていたので、徐、陶二君が共に上海にきた機会に、私と元康が徐君に陶君を紹介し、こうして浙江の会党がはじめて連合したのである。爆薬の製造がなかなかうまくいかないうちに、楊君は奮然として北に行き、保定で呉樾君および他の三人の同志を紹介して「暗殺団に」入れ……」——A⁽¹⁰⁾

「私が警鐘日報社にいる頃、愛国女学校の校長に再任された。その時は女学校を革命党の連絡、会見の場としていた。教員中でこの事に与つたのは、いとこの国親と龔味生「宝銓」君が最も多かった。蔡「国親」君はもともと陶煥卿に従つてしばしば金華、衢州、嚴州、処州等に行つて会党に働きかけ、彼らに連合して蜂起するよう説得していた。また紹興にも別の秘密結社があつて、それは嵎県の王金発君、竺紹康君が統率しており、彼らに働きかけたのは徐伯蓀錫麟君だった。この両派はあい謀ることがなかったが、陶、徐両君とも私と面識があつたので、両君に愛国女学校にきてもらい、連絡の方法を相談し、浙東両派の革命党はこうして合作し、のちついに光復会が成立したのである」——B⁽¹¹⁾

以上長々と引用した蔡元培の証言中、Aの内容には明らかな記憶違いが一つある。同盟会の成立時期と暗殺団の活動した時期をいっしょくたにしている点である。同盟会の成立は一九〇五年のことであり、上海で暗殺団が活動したのはその前年のことであつた。おそらくこのミスは、蔡元培に暗殺団と同盟会を紹介したのがいづれも何海樵であることからくる純然たる記憶ミスであつて作爲はない。しかし、この点を除いて、日本で楊篤生らが爆弾製造に取りくんだことや上海でやはり製造実験をしたことは、文中に登場する蘇鵬の証言の他にも陳独秀の回想でも確認でき、と⁽¹²⁾⁽¹³⁾

すれば、蔡元培が暗殺団に入会する経過やその後の活動状況を述べている点などは、先の陶成章の簡単にすぎる証言を補う内容で貴重である。さらにAを見ると、蔡元培は自ら入ったあと、鍾觀光、王季同ら日頃彼の身近にいる知識人、および陶成章、徐錫麟ら同郷の者を次々に紹介して、暗殺団を拡大していったことがわかる。

ところで、Bの内容およびその内容に該当するAの部分を見ると、陶成章と徐錫麟が手を結んで光復会が成立したとある。しかも陶成章が働きかけた会党グループと徐錫麟が働きかけた会党グループとはそれまで協力することがなかったが、蔡元培の仲介で手を結んだ結果光復会ができたというのである。会長として光復会の結成に積極的に関わったに違いない蔡元培の口から、このような証言がなされた意味は大きいと私は考える。この証言に従えば、光復会は、暗殺団拡大の延長上には位置づくものの、さらに会党の要素が加わってはじめてできたことになるが、そう理解することは、その後の光復会の展開からすれば、まったく正当なものに思えるのである。この点を頭に入れて再度Aを見ると、そこに名前のあがっている者は楊篤生が加入させた呉樾らを含めて、全員暗殺団に加入したということであって、それが光復会に改称してまた全員が光復会員になったとまではいっていないようにとれる。おそらく、暗殺団に入ってさらに光復会に入った者も入らなかった者もあり、また光復会になってから初めて入った者もいるということであろう。蔡元培の証言からはそこまで推量できそうであるが、陶成章の証言ではそう推量する余地さえないのである。さらに、ふだん連合することのなかった会党同士が、陶成章と徐錫麟の連携で結びついたと証言している点も興味深い。本来個別分散的な傾向を持つといわれる会党同士が結びつくには、信頼できる人間の紹介と両者に共通する大義が必要なのであるが、この場合、すでに一九〇三年に面識のある陶成章と徐錫麟が仲立ちになり、かつ排満の大義で結びついているのである。総じて私は、蔡元培の証言を従来以上に重視すべきであると考ええる。

もう一つ、沈黙民の証言を見る。⁽¹⁴⁾

「一九〇四年（甲辰）、龔宝銓も上海で暗殺団を組織し、陶成章、敖嘉熊、黄興らと秘かに連絡を取り合っていた。暗殺団はできたが、人数はとも少なく、勢力は弱かった。龔宝銓は組織を拡大したいと考えていたが、その時陶成章が上海にきた。龔と陶は東京にいた頃に刎頸の交わりをした仲で、二人は密談後、東京の浙学会で検討された内容に基づいて革命団体を組織した。章炳麟は獄中にあり、ただ蔡元培が清朝翰林院編修で声望が高かったので、彼を指導者に推してアピール効果を増そうとした。陶は、蔡の読書人気が濃厚で引き受けてはくれず、かえって仕事に不利を生じるのを恐れた。そこで龔がまず蔡と相談して暗殺団の組織を拡大することにし、蔡が自ら陶を誘って参加させ、こうして光復会がついに上海で正式に成立したのである。陶成章の『浙案紀略』に記された光復会成立の事情にやや食い違いがあるのは、奥ゆかしくも自らが創業の栄誉を得ることを願わなかったからにすぎない」。

文中の浙学会は、沈黙民自身の説明では、もともとは浙会といい、杭州にあつて革命を鼓吹したグループだが、清朝の弾圧に遭つて改名して活動を継承し、日本に留学した会員は東京でも集会を持っていた。一九〇三年十月、日露戦争がまさに勃発せんとする頃に戦争は長びくのは必至でこの時期を逃さず中国革命をおこそうとして、一度集まつて相談したことがあつた。参加者は、王嘉榘、蔣尊簋、許寿裳、沈黙民ら十余名だった。その際、秘密の革命団体をつくつて、宣伝工作をするだけでなく武装蜂起をおこす準備をしようとした。十一月にも集まりを持ち、革命武装根拠地を得るために、陶成章、魏蘭を浙江、安徽に派遣し、龔宝銓を上海に、張雄夫と沈黙民は湖南長沙に派遣して黄興と連合することにした。この二度の会議は光復会の名を使つてはいないが、実はこの時東京で光復会の活動が始

まつたことになる、という。

この証言が従来注目されてきたのは、他には見られない内容を豊富に含んでいるからであつた。例えば、東京に浙学会が存在し、そこで討議された内容が具体的に紹介されて、浙江出身の留学生が独自で革命を準備しようとした状況がわかり、光復会の起源は浙学会であるという説を生み出すことになつたし、光復会成立には陶成章と龔宝銓の密談が先にあり、暗殺団を拡大する方向で蔡元培を中心に担ぎだしたという裏話も、いかにもありそうな話で説得力を持った。他方、注目されるだけ一層内容のあらも目につき、他の資料に照らしてその時参加していそうにない人物が復数会議にでていたことになっている点は、著しく信用を落とし、また龔宝銓や陶成章らを国内に派遣する内容は、軍国民教育会の方針とも重なっていることから、浙学会イコール軍国民教育会浙江支部なる説もでて、沈颺民証言の持つ独自性に疑念を投げかけられることにもなつた。

しかし、五〇年を得たあとの回想に記憶違いがない方がおかしいのであつて、あらさがしは度をすぎない方がよいと私は思う。會議に誰と誰が出ていたかの正確さはともかく、彼のいいたいエッセンスは、東京での浙江出身者の集まり（彼はそれを浙学会と呼ぶ）で革命結社をつくらうではないかと話し合い、それを実際には陶成章と龔宝銓が中心になつて成立にまでこぎつけたのが光復会だ、という点であろう。その大わくが信頼に足るものであるかどうかであるが、結論からいえば信頼に足ると私は考える。すでに一で見たように、陶成章は帰国後浙東の会党めぐりをし、龔宝銓も時に行動を共にして、その後の光復会に引きつがれるような基盤づくりをしている点では、沈颺民の証言に符合しているからである。また、浙学会と軍国民教育会との関係は、メンバーの多くが両方にだぶっており、浙学会で検討された帰国方針も軍国民教育会の方針と思える点では、たしかにその支部的性格を持つて機能したのであろう

が、それは時がそうさせたのであって、元来浙学会独自の集まりがあり、当然独自の関心が語られたとする沈黙民の主張を否定することにはならないだろうと思うからである。

(15)

沈黙民の証言で、龔宝銓が上海で暗殺団を組織したとするのは、先の陶成章や蔡元培の証言中にはない点で注目される。成立の事情を何も語らないに等しい陶成章はともかく、蔡元培の語る暗殺団は楊篤生らが中心であつて、龔宝銓はわずかに愛国女学校の教師として名前が登場するのみである。強いていえば、愛国女学校の教師であることで暗殺団との関係を類推するしかないが、それも沈黙民の証言を前提にすればの話である。陶成章の証言中に登場する龔宝銓は、先にも見たが、必ずしも上海にとどまっているわけではなく、時々陶成章と顔を合せては何やら謀議をしているのである。思うに、龔が中心になつて、暗殺団を組織した状況はなく、あるいは蔡元培のいう暗殺団に当初から参加したか、あるいは途中から参加して、光復会に衣がえすべくあちこちで画策する任務を負った人物だったのである。

もう一つ沈黙民の証言で注目されるのは、陶成章が参加して正式に光復会が成立したとする点である。その場合徐錫麟は成立後に参加したことになり、徐錫麟が本格的に会党めぐりをするのはやはり成立後のことで、蔡元培の証言にある両者が手を結んで光復会が成立したという状況は存在しなかったことになる。どちらが是とも決めかねるが、あるいは、暗殺団に会党の要素が加わつて光復会が成立したことを、沈黙民はもともと準備段階で力を尽くした陶成章の立場から表現し、蔡元培はそのことを知るよしもなく、むしろ陶成章と並ぶ徐錫麟の力量を評価する立場から表現しただけかも知れない。

以上、光復会の成立事情に精通しているはずの三人の証言を見てきたが、こうして並べてみると、異なつた立場か

らの異なった成立事情が語られているという、当然の感想を抱くことになる。「光復会は軍国民教育会の暗殺団を母胎とするが、陶成章、徐錫麟ら会党への働きかけを実践した者が参加した時点で光復会が成立した」ととりあえずまとめておこう。

- 1 『秋風秋雨人を愁殺す』。
- 2 「浙案紀略」上巻第二章第一節。
- 3 徐市隠「緬甸中国同盟会開国革命史」(『華僑与辛亥革命』)。
- 4・5 「記光復会二三事」。
- 6 「華興会と光復会の成立過程」。
- 7 独頭「俄人要求立憲之鉄血主義」(第五期)。
- 8 任克「俄国虚無党女傑沙勃羅克伝」(第七期)。
- 9 蔡元培「我在教育界的経験」(『蔡元培先生記念集』)。
- 10 黄世暉記「蔡元培口述伝略」上(『蔡元培先生記念集』)。
- 11 蔡元培「自編年譜」稿本(『中華文史論叢』一九八四年一期、湯志鈞「論陶成章」より孫引き)。
- 12 「柳溪憶語」(『拒俄運動』)。
- 13 「蔡子民先生逝世後感言」(『蔡元培先生記念集』)。
- 14 注(4)に同じ。
- 15 馮自由『革命逸史』第二集「記上海志士与革命運動」に同様の記載がある。

ここでは、二までに言及してなおいい残した点を補足し、その他光復会の成立に関係する事項について述べる。

成立の時期は、先にとりあえずまとめた内容に従つて、一九〇四年十二月前後ではないかと考える。陶成章と徐錫麟の加入の時期を念頭においてのことである。しかし、従来は陶成章の証言によつて、万福華が王之春を射殺しようとして果たせなかつた時、すなわち一九〇四年十月十三日あるいはその前後のことだとしてきたのである。成立事情についての陶成章の証言を検討した際、そこに明らかな作為があると指摘したが、そこに作為がある以上、時期についても作為があつて不思議はない。たしかに、万福華事件の内容を見ると、この事件が当時上海に存在した暗殺団に与えたであろう衝撃はあつたと思わざるを得ない。万福華は、前の広西巡撫王之春が一九〇三年フランス兵を使つて会党蜂起を鎮圧する代りに鉄道敷設権などをフランスに譲りわたしただけでなく、翌年もロシア軍の東三省侵略に手を貸していることに憤慨し、王があるレストランに食事に入つたところを狙つて射殺しようとして失敗し逮捕されたのである。この事件はたとえ未遂に終つたとはいえ、拒法、拒俄に関わつて批難の的にあつた高官を倒そうというもので、暗殺団を標榜する彼らにとつては、自らの方向をさし示す象徴的な出来事といつてよいものだった。さらに、万福華が出入りしていた場所として、長沙蜂起失敗後上海に逃げてきていた黄興らのアジトが搜索され、居合せた数人が一時拘束されることがあつた。これをきっかけに華興会グループは上海には活動の基盤がなくなつたとして、黄興らは日本に向い、楊篤生は保定に行つて北方暗殺団をつくるのである。こうして、それまで一緒に暗殺団を構成し

てきたメンバーの中から一部が上海を離れなければならない事態が生じて、この事件を転機に暗殺団から光復会の結成に向う動きが始まった、あるいは強まったのではないかと推量されるわけである。だが、中村哲夫氏が述べるように、⁽¹⁾華興会が軍国民教育会の革命実践の「中国本土に設けた唯一の最高機関」であり、その指導下に浙江グループがあり、蜂起失敗による華興会の解体が光復会結成の機会を提供したとするのは誤りである。浙江出身者の光復会結成に向けた独自の動きはすでに見てきたごとくであり、華興会の黄興や楊篤生らとの関係も、事実には照らして上下関係とは捉えられないからである。軍国民教育会の組織実体や華興会と光復会の協力関係についてはのちにも言及することとし、今は、万福華事件は光復会結成に一定の影響を与え、それゆえ陶成章はその時期に成立したと証言しているとしても、その証言にも光復会が軍国民教育会の活動を正統に受けついだことを印象づけるための作為があり、実際には事件前後のさまざまな準備工作を経て、一九〇四年の年末までには会党の結集を主要な軸とする光復会が誕生するに到ったのだとらえておく。

次に名称の問題だが、光復会と名づけたのは、鄭雲山氏の指摘するように、⁽²⁾章炳麟が一九〇三年に鄭容の『革命軍』のために書いた「同族を改制することを革命といい、異族を駆除することを光復という。今中国は逆胡に滅亡させられているのだから、謀るべきは光復である」に由来するのであろう。陶成章は、光復会は復古会ともいい、⁽⁴⁾軍国民教育会の名称は消えたというが、⁽³⁾そうではなく、また、しばらくは暗殺団の名も使われたことがうかがわれるのである。

入会儀式については陳魏の証言が⁽⁵⁾あり、極秘の場所を選んで挙行し、針を刺して血を出し、天に向って誓いをたて、革命の決心を表明する。その際「漢族を光復し、我が山河を還し、身をもって国を許し、功成つて身退かん」という

四句の言葉を天に向けて発するという。また、綱領には「漢族を回復し、我が河山を還さん」という二句があるだけであったとは李書城の証言⁽⁶⁾である。従来このまことに短い四句ないし二句を使って光復会の性格が論じられる傾向があったが、私はのちの龍華会章程の内容などに照らしてみ⁽⁷⁾て、光復会成立時にもっと長い綱領的文章が作られたのではないかと疑っている。入会儀式も陳魏の回想では簡単にすぎ、それが龍華会章程に載る入会儀式のように、主に岳飛廟を使ったものだったのかどうか興味はあるところで、のちに改めて検討したいと思う。

1 「華興会と光復会の成立過程」

2 「光復会」。

3 例えば北方暗殺団は、別名軍国民教育会保定支部といった。

4 『朝日新聞』一九〇七年七月十一日号に載った「徐錫麟の閥歴」に「徐錫麟氏は……初^{はつ}は特に秘密会の中に運動して革命軍を起さんとせしが後ち暗殺団の組織せらるるや氏は即ち身を此会中に投じ候……日本人中には支部に〇〇暗殺団あるを知るもの少なく……」とある。

5 「光復会前期的活動片断」(『辛亥革命回憶録』第四集)。

6 「辛亥前後黃克強先生の革命活動」(『辛亥革命回憶録』第一集)。

7 平山周「支那革命党及秘密結社」。